

し合っていた。口に出すと考えをまとめやすい。

だが、一番の問題はわかりきっていた。

「とにかく姉上を探し出すことよね、もえぎ」

「はい」

そう、父が病に倒れたこの一大事に、姉の桜女御さくらのおんなごの行方が知れないままなのだ。

宮中にいる那珂姫ともえぎは探しに行きたくても動けない。そもそも貴族の姫は外出もままならない身の上だ。だから、屋敷にいる初野が大臣の看病のかたわら、郎党いらぬの勲いさお以下を捜索に当たらせているが、はかばかしくないらしい。

「私たちはどうすればいいのかしら……」

自分たちの手に余るなら、手助けが必要だ。だが、誰が今の桜大臣家に味方してくれるだろう。

桜大臣は病気で宮中に出仕することもできないということとを、もう知らない者はいない。つい先日、朝廷に辞表も出した。宮仕えもできない人間がいつまでも見苦しく職にしがみついているはならない。そのうちに、辞表が公式に受け入れられるだろう。そんな落ち目の家に、都の人間は冷たい。今までも多くの家がそうやって没落した。

それでも、那珂姫は最善をつくさなければならぬ。二の宮のために。

「二の宮が何よりも大事なものね」

「はい」

父である帝は、二の宮を見捨てはなさらないだろう。けれど、帝にはほかに御子がいる。二の宮の異母兄・皇太子と、生まれたばかりの異母弟・三の宮。

この三の宮の存在がことをややこしくしているのだ。三の宮は生母が出産の時に亡くなったため、桜大臣の政敵せいせき鶴つる大臣とその娘の皇后に守り育てられている。実子のない皇后は、ようやく母になれたと大喜びしているらしい。

その皇后と鶴大臣の思惑を無視できない帝は、桜大臣家に肩入ればかりもできないのだ。

那珂姫はため息をついて、気持ちを切り替える。

「帝よりもっと自由に動ける立場で、鶴大臣をはばからなくていい人……。あ」

那珂姫は言葉を切った。「いるかもしれない……」

「え？ どなたです？」

もえぎが体を乗り出した時、庭の石を踏む音が聞こえた。誰か来る。と、庭で遊んでいた二の宮が歓声を上げた。

「兄上！ お久しぶりです！」

「二の宮、お元気か。馬を引いてきた。この兄と遊ぼう」
皇太子のおなりだ。もえぎはあわてて迎えに出、那珂姫は同じく急いで部屋に入る。貴族の姫は人に姿を見られてはならない。ましてや相手が皇太子ならなおさらだ。

二の宮は兄に会えてはしゃいでいる。馬に乗せてもらって御殿の庭を歩いているので、二人の声が近づいたり遠ざ